

第4回期日 口頭弁論 原告意見陳述

2025年9月17日

安部 芙祐実

こんにちは。原告の安部芙祐実と申します。愛知県名古屋市で生まれ育ち、今は小学校教員として、日々、子どもたちと過ごしています。私は、未来を担う子どもたちが安心して生きられる社会にしていくことが、大人である私たちの責任だと思い、この場に立っています。

環境問題に関心をもったのは、5年前の春でした。調べていく中で、気候変動が私たちの生命や生活を根本から脅かしていることに気づきました。

私たちは、この夏も尋常ではない暑さを経験しました。異常気象はすでに子どもたちの日常を変えています。熱中症指数が高く、運動場が使えない日が増えています。私が小学生だった頃、真夏でも外で友達と夢中で遊ぶことができました。しかし、今の子どもたちは、そのような機会を奪われています。昨年10月には、休み時間に外で遊びたくても、体育の授業をしたくても、運動場に出られない日がありました。今年6月には、1時間目の休み時間から外へ出てはいけなほどの暑さになり、丸一日校舎内で過ごさなければいけない日が多くありました。

さらに、子どもたちは学校の中だけでなく、登下校の時間にも大きな危険にさらされています。朝の登校時からすでに汗だくになるほどの暑さで、特に下校時は一日の中で最も暑い時間帯にあたります。熱中症指数が高く「外遊び禁止」とされる日であっても、子どもたちは炎天下の中を歩いて帰らなければなりません。徒歩30分以上かかる子どももあり、その過酷さは想像以上です。水分補給に加え、日傘やネッククーラーなど、近年は様々な熱中症対策が必要になっています。それでも、具合が悪くなって途中で立ち止まっ

たり、頭痛や吐き気、強い疲労感を訴えたりする子もいます。そんな状況に、強い危機感を覚えます。

運動会も数年前から、暑さのために午後の競技がなくなり、1分単位でプログラムを組み、最低限の競技だけを午前中に終える形になりました。さらに、練習中の暑さも考慮して、開催時期は5月から11月へと移されました。私が子どもの頃は、家族や友達とお弁当を食べて午後まで競技を楽しむことが当たり前でした。みなさんも、そうではありませんか。あの楽しさ、あの充実感を、今の子どもたちは味わっていません。子どもたちは、気候変動によって、大切な思い出の一場面を奪われています。

学校の体育館は、5月から10月までサウナのように暑く、熱中症の症状を訴える子どももいました。今年の1月に冷暖房が完備されましたが、それは一時的な対症療法にすぎず、気候危機そのものを解決することにはなりません。広い体育館を冷やすために化石燃料が使われ、むしろ事態を悪化させる負のスパイラルに陥っています。

プールサイドが熱すぎて足を火傷した子どももいました。予定していた校外学習が、猛暑のために延期せざるを得ないこともありました。こうした現実には、子どもたちの学びや成長の機会を確実に奪っています。「また今日も外で遊べないの?」「先生、なんでこんなに暑い?」と不満や疑問を口にする子どもたち。その声を聞くたびに、私は焦りと無力感を感じます。今のままでは子どもたちに明るい未来を保証できないと思うと、胸が苦しくなります。

暑さの影響は子どもだけでなく、私たち教員にも及んでいます。私も、授業中に体力を奪われ、集中力が削がれたことがあります。また、常に子どもの体調に気を配り続けることで、十分な学習効果を上げられないこともあります。

気候危機は、子どもの未来だけでなく、教育という営みそのものを壊しています。

私はこの夏、気候危機の影響を海外でも目にしました。カナダやヨーロッパはもともと暑

い地域ではないため、住宅や交通機関に冷房がなく、猛暑で多くの人が危険にさらされています。コスタリカでは、コーヒーやカカオの農園で「気候変動で栽培が難しくなっている」と聞きました。気候危機は日本だけでなく、世界中で人々の健康や生活を脅かしています。日本もその責任から逃れることはできません。

日本を除く先進国の多くは、5年以内に、2030年までに石炭火力を廃止することを明らかにしています。先進国だけでなく、既に石炭火力を廃止した国々もあります。それと比べて日本はどうでしょうか。毎年のように不名誉な化石賞を受け取り、石炭火力廃止の目標すら掲げていません。

私が小学生の頃から「エコ」「節電」という言葉を耳にするようになり、私も幼心に取り組んだ記憶があります。それから15年以上が経ちますが、「地球温暖化」から「地球沸騰化」、「気候変動」から「気候危機」と新たな言葉が生まれたように、明らかに事態が悪化してきました。私たちが、これまで地球環境に真摯に向き合っていなかった結果なのかと、悲しくも納得してしまいました。

子どもや大切な人のために何かをしたい、幸せに生きてほしい、と誰もが思うはずなのに、気候変動に対する政策や行動はその思いと大きくかけ離れています。私には、本当に大切なものを置き去りにし、目先の利益や便利さに執着しているとしか思えません。日本も、責任を果たすべきです。

私たちは、これ以上、多くの生命やかけがえのない経験、自然を奪われるわけにはいきません。悲しみや苦しみを生みたくありません。だからこそ、多量のCO₂を排出している電力会社や政府の目標を変えてほしいのです。

子どもたちには、安心して健康的に生きる権利があるはずです。その権利を守るために、司法が人権の砦としての役割を果たしてくださることを強く求めます。

子どもたちの未来を守ることは私たちの責任です。取り返しがつかなくなる前に、どうか

今すぐ、気候危機に対して具体的な行動を起こしてください。それが、地球上に生きるすべての人々や生命を守ることもつながります。

私は、教師として、そして未来を担う一人の若者として、この想いを司法に託します。